

雑草の生い茂る庭

武 並 義 和

はじめに

『ハムレット』には筋の展開に直接関係のない部分がかなり含まれている。たとえば、＜子供一座＞についての批判（II. ii.），役者に聞かせる演劇論（III. ii.），それにオズリックをだしに語られる社会風俗批判（V. ii.）などがそうである。¹⁾ なかったほうがむしろ劇としての統一性、一貫性が保たれたであろうと思われる箇所が少なくない。その反面、シェイクスピアが明らかにしておいてくれたらと願わずにはおれない問題点がこれまた少なくない。

劇をどのように解釈するか、ある人物のある言動をどのように受けとめるかについて、ことのほか重要であるにもかかわらず、シェイクスピアがほとんど触れていないか、また触れていてもきわめて不十分にしか言及していない問題がある。このような問題のうちで典型的ともいえるものは、母の再婚後ハムレットがオフィーリアをどのように見ているかの問題である。彼女に対する気持は、その忌わしい出来事以降、何らかの変化をこうむったと考えられるが、シェイクスピアは片意地なほどハムレットの胸中を私たちに見せようとはしない。そのため、ハムレットは過去オフィーリアを愛していたのかどうか、また現在愛しているのかどうかをめぐって、しばしば無意味とも思われる意見が述べられることになる。

1) G. B. Harrison はそのほか酒癖についての長話、政治家の筆跡論、クローディアスの馬術についての話などをあげている。 *Shakespeare's Tragedies* (Routledge, 1951), p. 110 参照。

本稿では、劇中明らかにされていない、あいまいな状況や人物の心境を取り上げ、それらをコンテクストから注意深く明確にしようと試みる。この明確化は作品解釈にとって必要不可欠な前提であるが、この点を軽視して、偉大な文学作品は幾通りもの解釈が可能である、といった一見もっともらしい主張によりかかって、さまざまな奇想天外な説が提出されてきた。その中には耳目を集めるために奇をてらったとしか言いようのない解釈もある。とくに面白くないのは、否定的『ハムレット』論とでも名づけるべきものであろう。『ハムレット』を享受しない、いやできない人たちが展開する敵意を原動力とした批評である。ある学者はこの型の批評を＜診断的＞批評と呼んでいるが、そこに共通して見られる特徴は、全一性（たとえばハムレットの性格の）を見ないで、自説に都合のよい面だけを強調することである。そもそも自分が享受できない作品の批評は、差し控えるだけの謙虚さと良識を持つべきであらう。

これに対して、ブラッドレーやウィルソンらによって代表されるロマンチック批評には、その背後に愛の眼がある。悪所を見出そうと努力する＜診断＞型と反対に、長所に着目するロマンチック批評には、しばしば溺愛という欠点があるにしても、気付かずにいた点を啓示されることが多い。以下、ブラッドレーやウィルソンの意見をたびたび徴するのはこのためである。

『ハムレット』論はすでに書かれすぎている。今一つの論を付け加えることは、ありがた迷惑を押し付けるようで億劫になるほどである。しかし、これからおこなおうとする試みは、何か新しい注目すべき事柄を見出そうとすることにあるのではない。余りにも混沌とした批評を生み出した『ハムレット』の世界に、単純さと良識を導入し、平々凡々たる常識的な『ハムレット』観を積極的に打ち立てようというのである。事態は、常識的なものこそ尊ばるべきもの、というパラドックスが成立するほどにまで混乱しているのである。

2) Michael Long, *The Unnatural Scene* (Methuen, 1976), pp. 123—27参照。

1. この世は雑草の生い茂る庭だ

—'tis an unweeded garden—

ハムレットの第一独白は、多くの批評家が指摘するように、ハムレットの言動の理解に当たってもっとも重要な鍵となるものである。それは、この時点でのハムレットの置かれている状況と彼の心境とが31行の独白の中に圧縮されているからである——

O, that this too too sullied flesh would melt,
Thaw and resolve itself into a dew,
Or that the Everlasting had not fixed
His canon 'gainst self-slaughter. O God, God,
How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!
Fie on't, ah fie, 'tis an unweeded garden
That grows to seed, things rank and gross in nature
Possess it merely. That it should come to this,

...

A little month or ere those shoes were old
With which she followed my poor father's body
Like Niobe all tears, why she, even she ——
O God, a beast that wants discourse of reason
Would have mourned longer —— married with my uncle,

...

...O most wicked speed...to post
With such dexterity to incestuous sheets!³⁾

(I . ii, 129—57)

ああ、この余りにも汚れた肉体が
溶けて崩れて、露となって消えてしまえばいいのに、
それとも自殺を禁じたもう永遠の神の
掟がなければよいものを。ああ、神よ、

3) 原文の引用はすべて The New Shakespeare 版による。

自分にはこの世の営みの何もかもが、なんとわずらわしく
 味気ない、つまらない、無用なものに見えることか！
 ああ、いやだ、いやだ、この世は雑草の生い茂る庭だ、
 いたずらに茂って、けがらわしい醜草^{しこうさ}どもが
 わが物顔にはびこっている。ああ、こんなことになろうとは、

.....
 一月たつか、たたぬか、そうだ、父上のなきがらのあとから
 ニオベのように泣きぬれて歩いて行かれた母上の
 あの靴がまだ古びぬうちに、母上が、あの母上が——
 ああ、道理をわきまえぬ犬畜生でも
 もう少し長く喪に服したであらうに——叔父と結婚したのだ、

.....
 …ああ、何という浅ましい急ぎようだ…
 こうも手際よく不義の床へ急いで行くとは！

イタリック体の四行半は、事情がまだ私たちに十分に呑み込めないだけに、ややもすると軽く聞き流してしまう恐れのある箇所である。そればかりか、第一独白の残す強烈な印象——父の死後二カ月足らずしてあわただしく再婚した母の、獣にも劣る行為を嘆き悲しむハムレットの姿の影に取り残され、見失われがちな箇所である。

そこで、ハムレットの苦悩と絶望は、母の近親相姦の結婚から生じたとする見方が有力となる。たとえばウィルソンは「……母の近親相姦が全世界を
 <茂るにまかせた雑草の生い茂る庭>⁴⁾に変えたようだ……」と言っている。またブラッドレーも「彼は彼女の行為の中に、驚くべき浅薄な感情を、更に、醜悪な快楽にひた急ぎに急ぐ<臭い穢い>下司な肉慾の爆発を、見ざるを得ないのであった……（その経験は）先ず人間性への驚愕を、次に嫌悪を、次に絶望をもたらず。彼の全精神が毒されるのである」⁵⁾と述べている。

確かに、母の犯した罪の問題はその子ハムレットに異常深刻なショックを

4) John Dover Wilson, *What happens in HAMLET* (Cambridge, 1935), p. 260.

5) ブラッドレー著、中西信太郎訳『シェイクスピアの悲劇 上巻』（岩波文庫、1959）、p. 156。（引用にさいして字句を若干修正した。）A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1904), pp. 118—19.

与えたけれども、この見方は重大な今一つの事柄を不当に軽く見ている。というのは、「この世は雑草の生い茂る庭」、「けがらわしい醜草どもがわが物顔にはびこっている」などに見られるハムレットの情緒は、母の行状と関連はしていても、それををはるかに越えたものであるからである。劇中あとあとまでリフレインのごとく繰り返される、この暗い社会観、人生観は、ハムレットの思想の中枢的部分を形成しているが、この否定的な見方を彼に取らしめるにいたった事情を、ブラッドレーやウィルソンのように、母の再婚という事実だけに限定すれば、T. S. エリオットのいう有名な〈客観的相関物〉に欠けることになる。つまり、ハムレットは劇に示された事情によっては説明されえないような情緒に支配されていることになる。かくて次のような推論がおこなわれてきた。一つは、なんらかの事情により、おそらくは作者自身の苦悩のため、シェイクスピアは登場人物ハムレットの創造にさいして劇作家に要求される客観性を維持しえなかった、そのため作者自身の情緒がハムレットのそれに混入しているのではなからうかというのである。今一つは、改作を重ねた『ハムレット』において作者は古い不必要な要素の処理に失敗したのではなからうかという疑問である。

シェイクスピア自身の情緒の混入という推論には、簡単に打ち消しえないものが含まれているが、ハムレットの置かれている状況を明らかにしないで、安易にそれに頼ることは危険であろう。では主人公を圧倒する大きな苦悩と絶望は、母の再婚以外にいかなる状況とかかわりがあるだろうか。

私たちが注意しなければならない点は、シェイクスピアは三幕四場までハムレットをしてそのことに触れさせないが、父の死後、王位継承をめぐる起きた事態である。母と叔父とが、またポローニアスを筆頭とする重臣たちとが取った行動とその結果である。ウィルソンによると、ハムレットの生存したデンマークにおいては王位継承は長子相続制によるものであり、従ってクロードフィアス王は篡奪者⁶⁾ということになる。この説に対して有力な反論が出されている。それによるとデンマークの王位は世襲ではなく選挙制による

6) E. A. J. Honigmann, "The Politics in *Hamlet* and 'The World of the Play'"

ものであり、クローディアスは狡猾な策略を用いたであろうが、合法的に王位を獲得したことになる。詳細は英米の専門家にまかせるとして、結論は、ノールウェーにおいてもフォーティンブラス王の死後、息子のフォーティンブラスではなくて叔父が問題もなく即位していることを考えると、ウィルソン説は不利となる。しかしながら、反論説は次の事柄を見落している。つまり選挙制（貴族による）であったと仮定した場合、ハムレット王が、たとえば自然死をとげ、そのあとクローディアスが選ばれて即位したのであれば、その行為は合法的であり、篡奪とはいえない。けれども劇の事情はこれとは異なるのである。つまり、クローディアスの即位は二つのプロセスが一つに合体して初めて可能となったのである。第一のプロセスはハムレット王の殺害であり、第二は、公明正大とはいえない手段を用いて＜選ばれた＞ないしは認可を得たことである。後者のみに注目すれば篡奪とはいえないが、前者と結び付けて考えるとき、クローディアスの行為は事実上の篡奪といってよからう。いや、殺害されたハムレット王の立場からすれば、篡奪以外の何物でもなからう。

本筋に戻ろう。一幕二場の国务会議で、いかに威厳と手際よさを示そうと、またハムレットに対して父親としての愛情を、いかにまことしなやかな言葉でもって示そうと、クローディアスは実兄を殺害し、その王位と妃を横取りした卑劣漢であり、偽善者である。この事実をほとんど忘れてしまう批評家がいるけれども、それは客観的事実である。劇中劇によって犯罪の確証を掴んだハムレットが

A murderer and a villain,
A slave that is not twentieth part the tithe
Of your precedent lord, a vice of kings,
A cutpurse of the empire and the rule,

in *Stratford-Upon-Avon Studies* 5 *HAMLET* ed, by J. R. Brown and B. Harris (Edward Arnold, 1963), および Bernard Grebanier, *The Heart of Hamlet* (Thomas Y. Crowell, 1960), pp. 191—94参照。

That from a shelf the precious diadem stole
And put it in his pocket—— (Ⅲ. iv. 96—101)

人殺しの大悪党、
前の夫の爪の垢にもたりない
下司野郎、王を演じる道化役、
王位と王国をかすめ取った巾着切り、
尊い王冠を棚からこっそりくすねとり、
自分のふところへねじこんだ奴——

と言うとき、彼はクローディアスの正体の凶星をさしているのである。

第一独白の時点では、ハムレットはまだ叔父の犯罪の事実を知らない。しかし、鋭い透察力の持主であるハムレットは、すでに彼の正体をほぼ見破っている。

A little more than kin, and less than kind. (I. ii. 65)
親類以上だが、情愛はうすい。

My father's brother, but no more like my father
Than I to Hercules, (152—53)
父上の弟とはいえ、このおれがヘラクレスと違うほど
父上に似ても似つかぬ男、

I doubt some foul play...
...foul deeds will rise,
Though all the earth o'erwhelm, to men's eyes. (256—58)
何か忌むしいことがあるのだ
……よこしまなおこないは、
たとえ大地がおおい隠そうとも、いつかは人の目に現われるものだ。

亡霊から話を聞く前に、すでにハムレットはこのように言っている。そして事の真相を教えられたとき、‘O, my prophetic soul! / my uncle?’ (おお、わが心の予感に狂いはなかった。／あの叔父が?) と叫んでいる。ハムレットは叔父の人品に対してさげすみと嫌悪と不信の情以外何物も抱きえなかった。それは、一部批評家のいうように、父を慕う余りの叔父に対する歪んだ

病的な感情などではなく、ハムレットの直感の鋭利さを物語るものである。ハムレットは、G. R. エリオットの言うように「クローディアスの抜け目のない親切さからローゼンクランツとギルデンスターンのうつろな友情にいたるまで、およそ他人の〈好ましい〉、もっともらしい感情を見透す⁷⁾」力を持っている。

いかがわしい人物クローディアスが「貞淑無比と見えた」母を墮落させ、近親相姦⁸⁾の結婚をした。それだけではない。民衆に人気のあった（クローディアスの言、IV. vii. 18）有力な後継者である自分を押しのけ、父王存命中は皆からさげすまれていた（ハムレットの言、II. ii. 367—68）クローディアスがどさくさにまぎれ王位についた。問題の結婚を容認させるため、また王に選ばれるため、クローディアスはいかなる手段を用いたのか。疑いもなく‘foul play’があったに違いない。にもかかわらず、異議を申し立てる忠臣は誰ひとりいない。前王への忠誠心を如才なく忘れ、買収されるがまま新権力におもねる廷臣たち。その世界は、母として、叔父として、一国の長たる指導者として、いや人間としてあるまじき行為が公然とまかり通る世界である。母の裏切によって親子間の愛情の絆を絶ち切れ、道義と信義にもとる行為によって人間への信頼感をゆさぶられ、しかも共感の欠如によって苦悩の鬱積する青年ハムレット、喪服姿のハムレットは、このような状況の中に置かれているのである。「雑草の生い茂る庭」云々——人間と社会を評してのまたとない名言——は、このコンテキストにおいてのみ十全な意味を持つことになろう。独白の最後の二行は、きわめて示唆的である——

It is not, nor it cannot come to good,
But break my heart, for I must hold my tongue.

(I. ii. 158—59)

これはよくないことだ、よいことになるはずがないぞ、

7) G. R. Elliott, *Scourge and Minister* (Ams Press, 1951), p. 68.

8) 未亡人と義弟との結婚が法的に認められたのは、英国においては今世紀に入ってからのことであるという事実には注意しなければならない。

だが、この胸が張り裂けようとも、おれは黙っていなければならぬ。

この〈状況〉を表わす 'It' は、直接には母の行為をさしている。しかし「胸が張り裂けようとも、黙っていなければならぬ」と絶句するハムレットの胸中には、母の問題があるだけではない。何もかも不都合な成り行きであるにもかかわらず、喜色満面の宮廷——「やさしくほほえみ、ほほえみ、しかも悪党たりうる」('one may smile, and smile and be a villain') ——の雰囲気の中で黙っていなければならない孤独な自分を、ハムレットは悲劇的に意識している。天と神にそむいた人間が天と神を引き合いに出して、神意にかなうまっとうな人間を批判する——

But to persever

In obstinate condolement is a course

Of impious stubbornness, 'tis unmanly grief,

It shows a will most incorrect to heaven,

...

... 'tis a fault to heaven,

A fault against the dead, a fault to nature, (I.ii.92—102)

いつまでも、かたくなに

悲歎に暮れるのは、神をおそれぬ

強情さというものだ、男らしくない嘆きだ、

天意に従おうとしない意志の現われというもの、

...

…それこそ天にさからう罪、

死者を冒瀆する罪、自然にそむく罪というものだ。

孤独であるが故に、ハムレットはこの屈辱にじっと耐えねばならない。墮落した宮廷を背景にして、純粋で高貴な、妥協を許さぬハムレットの姿が私たちの目に浮かばねばならない。

ハムレットを取り囲む世界は異常の世界である。亡霊の出現そのものがそのことをすでに物語っているが、作者はそのほか異常さを暗示する文句を積み重ね、デンマーク国の暗いイメージを作り上げようと試みている。「これ

はよくないことだ、よいことになるはずがない」と前後して――

Horatio. This bodes some strange eruption to our state.

(I. i. 69)

これ（亡霊の出現）は何か異変がわが国に起こる前触れだ。

Mercellus. Something is rotten in the state of Denmark.

(I. iv. 90)

何かが腐っているのだ、デンマーク国では。

さらに、次の有名な言葉で第一幕が締めくくられる――

The time is out of joint, O curséd spite,

That ever I was born to set it right! (I. v. 188—89)

この世の関節がはずれている、何という悪因縁か、

それを正すべくこの世に生を受けたとは、

この言葉をブラッドレーのように、復讐を誓ったばかりのハムレットが病的な憂鬱に陥っている状態を示すものと見るのは、ハムレットに酷であろう。数カ月前まで抱いていた誠実、信義、愛、人間らしさに対する信頼が、次々と崩れ去っていく光景に愕然となり、自己を見失わんばかりの男が、周囲との完全な精神的亀裂という耐えがたい苦悩を背負いつつ、世を正さねばならないのである。メイナード、マックの言うように、「ハムレットの状況は、シェイクスピアの他の悲劇主人公の状況と違って、ほとんどすべて彼が作り出したものではない。彼は受け継いだのだ。＜正すために生まれた＞のである。⁹⁾」不運なめぐり合わせというよりほかあるまい。

9) Maynard Mack, "The World of Hamlet" in *Discussions of HAMLET* ed. by J. C. Levenson (D. C. Heath and Company, 1960), p. 91.

2. デンマークは牢獄だ

— Denmark's a prison —

「この世は雑草の生い茂る庭」とはかなみ、生の倦怠に陥っているハムレットに超自然界から恐るべき衝撃が加えられる。つまり、父王弑逆という極悪の犯罪が腐敗の表面下に隠されていることを亡霊から教えられる。

＜雑草＞のイメージは、亡霊との出会いのあと＜はずれた関節＞のイメージへ発展し、ハムレットの捉え方が表面的なものから、より内面へと深まったことを示している。さらに、数十日後のギルデンスターンとローゼンクラッツとの対面では、＜牢獄＞のイメージが使われている。

Hamlet. Denmark's a prison.

Rosencrantz. Then is the world one.

Hamlet. A goodly one, in which there are many confines, wards and dungeons; Denmark being one o'th'worst.

(II. ii. 246—50)

ハムレット. デンマークは牢獄だ。

ローゼンクラッツ. それでは世界が牢獄です。

ハムレット. 壮大な牢獄だ、その中には拘置所も独房も土牢もある。中でも一番ひどいのがデンマークだ。

栄達のみを目を奪われている廷臣たちには、このような見方は途方もない言いがかりでしかない。しかしハムレットにとっては誇張でも何でもない。彼はデンマークという牢獄に閉じ込められているのだ。他国への亡命は、デンマーク即世界と見なす王子ハムレットにとって死を選ぶのと同じことである。従ってデンマークは、彼にとって自己の生命を絶つという手段を除いては、もはや脱獄の観念そのものが成立しない絶望の場である。（ローゼンクラッツにあいづちを打って「(世界は) 壮大な牢獄だ」とハムレットがいうとき、それは言葉のあやとも受け取れるが、同時にハムレットの背後にシェイクスピアの存在を意識せざるをえないのではないか。)

そして牢獄の中の王は、兄殺しのクローディアスである。「帝王や尊大ぶ

った英雄たちは乞食の影だ」という文句は、ハムレットの牢獄の王クロード・ィアスという見方からたやすく導き出されるさげすみの言葉であって、単なる奇想ではない。

...this goodly frame the earth, seems to me a sterile promontory
 ...this majestic roof fretted with golden fire, why it appeareth
 nothing to me but a foul and pestilent congregation of vapours....
 What a piece of work is a man, how noble in reason... how like
 a god: the beauty of the world; the paragon of animals; and yet
 to me, what is this quintessence of dust? man delights not me,
 no, nor woman neither... (II. ii. 302—13)

…この地球というすばらしい建造物も荒涼たる岬のようにしか見えない…金色に輝く星を散りばめた天空も、何ということだ、おれにはけがらわしい毒気のおつまりとしか思えぬのだ…人間とは何という自然の傑作だろう、理性は何と気高いことか…まさに神ちりあぐたさながら、この世界の美の極致、万物の霊長。だが、このおれには、この塵芥のかたまりが何だというのだ？ 人間はおもしろくない、いや、女だって同じだ…

ここには、かつてはハムレット自身その信奉者であった伝統的な誇らしげな宇宙観と人間観がまず語られ、ついでそれと見事な対照をなして現在のハムレットの厭世観と人間嫌悪 (misanthropy) とが述べられている。「荒涼たる岬」, 「けがらわしい毒気のおつまり」, 「塵芥」といったイメージがハムレットを捉えて離さない。

一切の希望もなく、一切の生きる目標もなく、〈牢獄〉の中で無力感に打ちひしがれ、単に肉体的に生存を続ける——これがハムレットである。死について瞑想にふけるのも当然であろう。亡霊に対して恋の思いの翼も及ばぬ速さで復讐に立ち上がると言って見せた決意も、手帳に記した誓いも、生に対する信頼——行動力の源泉——を喪失したハムレットにとって、しょせん一時的な発作でしかない。

〈急場を救う神〉 (deus ex machina) が外部から強力な援助と明るい展望を与えない限り、〈絶望の沼〉 ('the slough of despond') に落ち込んだ

ハムレットはもはや身動きできない。これこそ、父の死後変わり果て、行きつくところまで行きついたハムレットの姿である。とはいえ、シェイクスピアは英雄ハムレットを描いている。超人的ともいえる不屈の精神力と鋭利な知性とでもって、彼は容易に屈することなく、たとえ効果的な行動は取れなくとも、最後まで重荷を引きずって生きていく。私たちが心を打たれるのは、このプロセスにである。

以上見たように、ハムレットを苦悩させ、病的な憂鬱の状態にまで引きずり込むのは、しばしば誤って強調される母の不倫な行為だけではない。それは、母、叔父、ポローニアスといった個々の人間というよりは、デンマークという社会、デンマークという牢獄である。しかしながら、このことは前述したようにそれほど明らかにされていない。第一独白でも「雑草の生い茂る庭」のくだりは抽象的であって、具体的に王位のことや重臣たちの卑屈、腐敗のことには触れられていない。ハムレットはなぜそれほど重大な事柄に触れなかったのであろうか。ウィルソンは「シェイクスピアはそれ（王位篡奪に対するハムレットの憤り）をより明白にすることを必要とは考えなかった。観客が最初から状況を推測するだろうということを彼は知っていた¹⁰⁾」と述べている。シェイクスピアの思わくという点からは、あるいはこのように言うことができるかもしれない。しかしそれよりは、ハムレットの心境について作者が適切な配慮をおこなったと見られよう。つまり、ハムレットの沈黙が意味するところは、再婚および近親相姦という倫理的問題に全存在をかけて悩むハムレットにとって、一言でいえば＜人間＞について考えるハムレットにとって、王位継承という政治と権力の問題、またそれにまつわる醜悪さは卑小なものでしかない、ということであろう。私たちは王子ハムレットよりは人間ハムレットを、地位や名誉や権利を重んずる実利的な精神よりも、人間性を尊重する純粋無垢な魂を、印象づけられるのである。人間ハムレットにとって、最高権力者王は＜乞食の影＞であり、彼は「たとえ胡桃^{くるみ}の殻に閉じこめられようと、自分を無限の宇宙を支配する王と見なすことのできる」

10) Wilson, pp. 30—31.

人間である（政治や権力を超越するハムレットの人的視点は、＜王＝蛆虫の場＞（IV. iii, 16—30）および＜アレキサンダー大王＝樽の栓の場＞（V. i, 192—210）においても見られる）。

3. 今なら生き血でもすすることができる¹¹⁾

—now could I drink hot blood—

劇中劇によって叔父の犯罪の確証を掴み、勝利感に酔いしれたハムレットは、ホレイショ相手に歌い出すほどのはしゃぎようである。しかし、現国王の弑逆を関知せぬ全宮廷人は＜ゴンザーゴ殺し＞をどう受け取るだろうか。この芝居は王位についていないが、有力な後継者であった王子の命により上演された王殺しの劇である。しかも上演中のハムレットの侮蔑的なせりふ、とりわけ劇の王の暗殺者ルシアーナスを、‘brother to the king’（クローディアスを意味する）と言わずに ‘nephew to the king’（ハムレット自身のことになる）と呼んだことは、ハムレットの王に対する殺意を疑いのないものにする。従って劇の王と妃とを、再婚のことを語り合っているが故に故ハムレット王とガートルードとする見方は、少なくとも宮廷人には影のうすいものとなる。

かくてローゼン・ギルデン（ローゼンクランツとギルデンスターンのことを、こう呼ぶことにする。それほどこの兩人は見分けがたく似通っており、また一度を除いて常に行動を共にし、お互いに補い合って一人前の人間であるかのような印象を与える）は、王の生命を脅かしたハムレットの不遜なおこないを咎めようと相当な見幕でやって来る。今度ばかりは誰の目にも明らかな落度を捉えて王子をとっちめようとする。とぼけた返答を繰り返すハムレットに、いらいらした彼らは単刀直入にハムレットの奇怪なふるまいの因を問いただそうとする。権力を笠に着た、身の程をわきまえぬ彼らに、遂に

11) あいまいな状況の一つとして＜尼寺の場＞を取り上げねばならないが、これについてはすでに他の機会に論じた。

ハムレットは彼らには吹くことのできぬ笛を押しつけつつ、

‘Sblood, do you think I am easier to be played on than a pipe?
call me what instrument you will, though you can fret me, you
cannot play upon me. (Ⅲ. ii. 372—74)

ふざけるな、一本の笛よりもおれのほうがかなでやすいとも思っているのか。
おれをどんな楽器扱いしようと勝手だが、おれを怒らすことはできても、うま
く吹き鳴らすことはできないぞ。

と言って、兩人を完膚なきまでに打ちのめす。

ハムレットの攻撃の火蓋は切って落とされたのだ。王のいわば尖兵を撃退
し終り、ひとりになったハムレットは独白する——

‘Tis now the very witching time of night,
When churchyards yawn, and hell itself breathes out
Contagion to this world: now could I drink hot blood,
And do such bitter business as the day
Would quake to look on: soft, now to my mother ——
O heart, lose not thy nature, let not ever
The soul of Nero enter this firm bosom,
Let me be cruel not unnatural.
I will speak daggers to her, but use none.
My tongue and soul in this be hypocrites,
How in my words somever she be shent,
To give them seals never, my soul, consent! (Ⅲ. ii. 391—402)

夜もふけた、まさに魔女どもがうごめき出す時刻だ、
墓が大きく口を開き、地獄が毒気をこの世に
吹き出す時刻だ。今なら生き血でもすすることができるぞ、
白昼の光の下では、見ただけで慄えおののくような
残忍なことでもやってのけよう。だが待て、まず母上のところへ——
おお、心よ、自然の情を忘れるな、かりにも母親殺しの
ネロの魂をこの胸に宿してはならぬぞ、
いかほど冷酷であっても、けっして子としての情を失ってはならぬ。
母上には剣の舌を振おうとも、本物の剣を用いてはならぬ。
舌と心はお互いに裏切り合うのだ、
言葉でどれほど激しく母上を責め立てようとも、

いいか、心よ、言葉を実行に移してはならぬ。

この独白は、ギルグッドの経験によれば余りにエリザベス朝的な感情の表現であるためか、今日の観客には受けなかったという¹²⁾。しかしながら、この独白はハムレットの行動力にまつわる謎を解くために、きわめて重要なものである。今までどうしてもできなかった復讐のための心構えが、劇中劇の成功後、ようやくにしてこの時点で可能となったことを、この独白は語っている。

時はまさに魔女が動き出し、墓が大きな口を開く時刻であり、生き血をすすすることも、どんなむごたらしい所業でも今ならやれるとハムレットはつよく。彼は今や上げ潮に乗っている。いかなる障害物をも呑みこまずにはおかない恐ろしい復讐心の波に乗っている。「だが待て、まず母上のところへ」行かねばならぬ（これを行動回避の無意識的な現われとこじつけて考える必要はない。というのはハムレットは母に呼ばれているのだから）。

けれども、殺気立っているハムレットはネロの二の舞を演ずること、母殺しを恐れている。そして短剣のように突きささる言葉を浴びせようとも、実際の剣は用いてはならぬと自分を戒めている。私たちはこれらの言葉を額面通り受け取らねばならない。ハムレットは残忍すぎるといって割りきしてはならない。ここに見られるものこそ、まぎれもないハムレットの一面である。

母の寝室へ行く途中、ハムレットは罪におののき、祈りを捧げている叔父の背後を通りかかる。復讐の絶好の機会だ。しかし彼はこの機会を見逃す。魂を清めている叔父を殺しても、それは彼を天国へ送るだけのことで、復讐にはならないと考えなおす。

さて、この場のハムレットを解釈する有力な説の一つは、行動を回避したいという無意識的な気持を、神学上の理由を持ち出して正当化しているという自己欺瞞説である。しかしながら、祈っている王の背後に立ちつくしたと

12) John Gielgud, "On the *Hamlet* Stage Tradition" in *Interpreting Hamlet*, ed. by Russell E. Leavenworth (Howard Chandler, 1960), p. 162.

きのハムレットは、それまでとは違って、すさまじい行動力を秘めたハムレットである。復讐を思いとどまらせた宗教上の理由が、いかに今日の私たちになじめないものであっても、そのまま認めなければならない。聖餐式、聖油、懺悔の有無によって魂の行きつくところが天国か地獄にわかれるという思想は、一幕五場で亡霊によって語られ、また五幕二場ローゼン・ギルデンの処刑を英国王に要求するハムレットの文面にも見られる。

ブラッドレーもウィルソンも、宗教上の理由を「延引の無意識的な口実」と見る点で一致している。さらにブラッドレーによれば、「彼が口にする最初の五語 ‘Now might I do it’ (＜今ならやれる＞) は、＜やりたい＞という実際の願望を持たないことを示している¹³⁾」ことになる。けれども、この弱い決意表現は、祈りという敬虔な行為が本来高潔なハムレットの殺意を無意識のうちに弱めたためと考えられよう。ガンジーの＜無抵抗主義＞の理論ではないが、祈りの前にあっては、残忍な刃といえども少なくとも一瞬はたじろかざるをえないであろう。この点についてウォーカーはほぼ同主旨のことを次のように述べている（もっとも他の諸点については彼の見方は本稿のそれとほとんど相容れないが）——「祈っている非武装の男を背後から突き刺すことができるとしたら、ハムレットはハムレットではなからう¹⁴⁾」。

ここでシェイクスピアが意図したものは、ハムレットの自己欺瞞ではなく、運命のアイロニーである。正常であることが困難であるほどの苦悶に堪えた後、ハムレットはやっと復讐にかなう心の準備がととのった。そして、さあやるぞ、という行動の機会（考えてみれば祈りの場は決して復讐に絶好の機会などではない）が初めて訪れたとき、宗教上の理由によって阻止される。それはいたしかたのないことである。彼はジョンソン博士をして、‘too horrible to be read or to be uttered’（「余りに恐ろしくて読むことも口にすることもできない」）と言わしめた、また観客にも受けのよくない捨てぜりふを残して退場する——

13) Bradley, pp. 134—35.

14) Roy Walker, *The Time Is Out Of Joint* (Andrew Dakers, 1948), p. 100.

Up, sword, and know thou a more horrid hent,
 When he is drunk asleep, or in his rage,
 Or in th'incestuous pleasure of his bed,
 At game, a-swearing, or about some act
 That has no relish of salvation in't,
 Then trip him that his heels may kick at heaven,
 And that his soul may be as damned and black
 As hell whereto it goes; my mother stays,
 This physic but prolongs thy sickly days. (Ⅲ. iii. 88—96)

剣よ、さやに、そしてもっと恐ろしい機会を待つのだ、
 やつが飲んだくれて眠っているか、怒り狂っているか、
 あるいは邪淫の床に快楽をむさぼっているか、
 賭博にふけるか、それとも呪っているか、そのほか
 救いようのない行為にふけているとき、
 そのときこそ、やつを突き落とし、その踵に天をけらせ、
 その魂をたどり着く地獄と同様、
 のろわれたどす黒さに染まらせてやるのだ。母上が待っている、
 この延命薬はおまえの病める日々を延ばすだけなのだ。

だが、この残忍な配慮は不要だった。クローディアスは立ち上がっている——

My words fly up, my thoughts remain below.
 Words without thoughts never to heaven go. (Ⅲ. iii. 97—8)
 言葉は天に舞い上がっても、思いは地にとどまる。
 思いの伴わぬ言葉は天には届かぬ。

このように彼は祈っていなかった。ハムレットは一幕二場で、母に向かって中味の伴わぬうわべだけの外見は、誰にでも装えるものと皮肉を言っている。そのハムレットが今クローディアスの敬虔な外見に惑わされたのだ。まさに運命のいたずらである。退いていくハムレットを見て、ほくそえむ女神。

彼女の翻弄は、さらにハムレットにとって致命的ともいえる段階に進む。叔父を見逃したとはいえ、復讐心に燃えるハムレットは母の部屋にやってくる。押し問答のうちに王妃は、彼の殺意に怯え、助けを求める。その声につ

られて、壁掛の背後でポローニウスが叫び声を上げる。「何だ一体、ねずみか？くたばれ、これでもか、くたばれ」と言いつつ、ハムレットは壁掛を通して突き刺す。

王妃の言う通り、これは「早まった、むごたらしい行為」である。そしてまた、先刻の「今なら生き血でもすすることができる」云々の独白通りである。前述したごとく、ハムレットはネロの二の舞を演じることだけを恐れているが、全身これ殺意と化した男となっている。だからこそ、誰であるか確認もせず、一瞬のためらいもなく刺殺行為に走ったのである。そこには今しがた仇敵を止むをえず見逃したという焦慮と、今度こそは逃さぬという意地とが働いたと見られよう。それにしても、何という事の成り行きであろう。私たちから見て、結果的にはハムレットが行動すべきであったときに行動せず、行動すべきでないときに行動するとは。またハムレット自身から見て、行動できなかった彼がやっと行動できたとき、それは不運を招く行動でしかなかったとは。運命に翻弄された主人公の軽率な誤った行動のために、彼の復讐への気力はそがれるのである。

(未完)